備中国小田郡家について

日 野 尚 志

1 はじめに

律令時代における郡の政治中心地である郡家が国府同様に一定の都市的プラン（足利 1963・1965）にもとづいていたか否かは明らかでないが、現在の景観から、郡家域の規模を推察することも決して無意味ではないと考え、備中国小田郡家域についての見解を示し、先学の御叱正を賜りたいと願うものである。

2 小田郡の成立について

第1図によって律令時代における小田郡域をみると、郡名を負う小田を中心にして、ほぼ「エ」の字型をなしているが、地形的には一部を除き、内陸部の小田川の流域と笠岡付近の瀬戸内海に注ぐ吉田・有田の2河川の流域とに区分することができる。しかし、この郡域がどのような過程をへて成立したのか明らかでないが、大化前代における波区芸県を中心にして形成されたのであろう。「日本書紀」応神天皇20年9月条に「(前略)因以割₂吉備国₁封₂其子等₁也。則分₂川島県₁封₂長子稻速別₁。是下道臣之始祖也。次以₂上道県₁封₂中子仲彦₁。是上道臣・香屋臣之始祖也。次以₂三野県₁封₂弟彦₁。是三野臣之始祖也。復以₂波区芸県₁封₂御友別弟鴨

別₁。是笠臣之始祖也。即以₂苑県₁封₂兄浦凝別₁。是苑臣之始祖也。即以₂織部₁賜₂兄媛₁。是以其子孫於今在₂于吉備国₁。是其縁也」とあり、波区芸県は吉備国の分封の時に、御友別弟鴨別が封ぜられた県で、笠臣の始祖であったことから、「国造本紀」に「笠臣国造 輕島豊明朝御世。元封₂鴨別命八世孫笠三枝臣₁定₂-賜国造₁」と記された笠臣国造と関係が深かったことがわかる。笠臣国造の本貫地は現在の笠岡付近と考えられるが、法隆寺旧藏御物の金銅観音菩薩造像記に「辛亥年7月10日記笠評君名大古臣辛丑日崩去 辰時故兄在布奈 太利古臣又伯佐建古臣二人志願」とあり、評君は郡司の先駆的形態である点から考えて、県時代以来の首長として世襲的な地位を持っていた笠氏の存在（岡山県史 1962）を想定することができる。そして「日本書紀」天武天皇13年11月1日条に「(前略)下道臣(中略)笠臣(後略)凡五十二氏賜₁姓曰₂朝臣₁」とあり、吉備氏系統としては下道臣と笠臣だけが朝臣姓を賜わっていることから、中央において笠氏の存在が高く評価されていたのであろう。「類聚三代格」卷一神官司神主禰宜事条に「勅。戸座(中略)備中国^{海部首 生部首}_{右皇后宮供奉}笠^皇臣(後略)天平3年6月24日」とあり、備中国の神事に笠臣が関与していたことがわかる。しかし、本貫地付近では一人も知られないこと、さらには郡・郷名にも遺称名が残らないことから、笠氏の主流は早くから、国造・県主の地位を離れて中央の下級豪族の家柄（岡山県史 1962）となったのであろう。一族のなかでは遣唐使として活躍した笠臣諸石（「日本書紀」天智天皇6年11月13日条）、隼人征伐の副將軍になった笠臣御室（「続日本紀」養老4年3月4日条）、右大弁になった笠臣麿呂（「続日本紀」養老4年10月9日条）等が代表的な人物であらう。

小田川の流域には上流から後月・小田・下道の3郡があり、吉備中県を中心にして形成された後月郡が、苑・川島の2県を中心にして形成された下道郡が、それぞれ考えられるが、小田

第1図 備中国小田郡域

郡とこれらの県との関係は明らかでない。しかし、下道郡に近い実成郷の遺名を残す矢掛町大字東三成から、元禄12年11月に「以和銅元年歳次戊申11月27日酉戌、銘下道罔勝、弟罔依朝臣、右二人母夫人之骨藏器、故知後人明不可移破」と記された下道臣罔勝の母の墓誌銘を付した骨藏器（『寧楽遺文下巻』金石文）が発見されていることから、この実成郷付近は大化前代においては川島県に属していたといえるであろう。

後月郡が高屋川・小田川に、下道郡が小田川に、それぞれ沿っている山陽道を中心にして、内陸部に郡域が形成されていることから、当時の主要な交通路であった山陽道に接するために、吉備中・川島2県の一部を割き、波区芸県を中心にして小田郡域が形成されたために、水系の異なる二地域をもつ小田郡域が成立したとも考えられる。郡名を負う小田が後月郡境に近いのも事実であるが、ほぼ郡域の中心部にあたり、しかも小田川流域から地形上最も障害がなく、最短距離で瀬戸内海の笠岡に至る地点に非常に近いことにも注目したい。「和名類聚抄」によれば、小田郡に実成・拜慈・草壁・小田・甲努・魚渚・駅里・出部の8郷が記され、郡の規模は中郡であったことがわかる。

3 小田郡家址について

小田郡矢掛町大字小田に「郡上」・「郡脇」・「郡前」の小字名があり、これらの小字名が郡名を負う小田にあることから、小田に郡家址が比定できることは間違いないだろう。狭小な埋積谷をなす小田には、 $N18^{\circ}E$ の方位をもつ条里地割が検出され、第2図から後月郡境から矢掛にかけて検出される $N21^{\circ}W$ の方位をもつ条里地割とは、方位も異なり、土地割も連続しない別の条里区をなしている。さらに小田の熊池（現在は埋立てられてグラウンドになっている）の北には、小田とは同じ水系をなす狭小な埋積谷にも $N41^{\circ}W$ の方位をもつ条里地割が検出されるが、熊池を境にして小田とは別の条里区であることがわかる。さらに小田の条里地割を矢掛町都市計画3千分の1図でよく検討してみると、第3図からA-Cより南ではA-Cを境にして、 $N32^{\circ}W$ の方位をもつ条里地割がごく僅かながら検出され、この条里地割もA-Cより熊池にかけて検出される条里地割とは明らかに別の条里区をなしていることがわかる。したがって、A-Cより熊池に至る局地的な条里地割が一つの条里区をなし、しかもこの条里区のなかに前述の三つの小字名があることから、この条里区に小田郡家址が想定されるのである。

郡家の広さについては郡家内部の主要構成要素である政庁、正倉群を中心とした建物の種

第2図 備中国小田郡小田川流域の条里地割分布

第3図 備中国小田郡家付近の歴史地図

第4図 推定小田郡付近の小字名

類，数，面積等（足利 1969）について究明し，考古学的な発掘によってさらに精確さを高めなければならないが，現在までに小田から郡家址に結びつくような遺物はなにも発見されていない。

い。ここでは現在の景観から小田郡家址について考察してみたい。

小田付近の地形を観察してみると，A-Bの南端は小川より1.5m ないし1mの高さを，

B-Cの南端は道路より1mないし50cm前後の高さを、それぞれ有し、A-Cが土塁状の高さをもって、南とは明らかに区別されるのである。しかも小字「郡前」・「郡上」の地積が第4図からもわかるように、A-Cより南に出ないことから、このA-Cが郡家城の南端であったことは間違いないだろう。ここではA点より北に2町のL点からM点に流れる小川がA-Bと同様にほぼ直線で、しかもM点でほぼ直角に曲ってB点に至るのである。さらにL-Mから北は条里地割が検出されないが、O点から流れ出る小川が条里地割の検出されるN点に至って始めてほぼ直線に流れ、M点でL点から流れてくる小川と合流している。このように3つの小川がN-Bに沿って流れ、林田川に流入しないことから、N-B間が人為的な流路であることは確かであろう。B点からの小川はP点まで曲流し、P点から小田川の合流点であるQ点まで条里地割の坪境に沿っている。

つぎにE-D-Bを結ぶ線が埋積谷の中央にあって、条里地割が最も南北に長く認められ、しかも小田から日置谷に至る道路にも利用されていることから、小田郡家の中軸線であったことは確実であろう。このことはA-C間が6町で、B点がある中間にあたることから理解されるのである。さらにA-C間が6町であることは、郡家城の南端が6町であったことを示唆するようである。

A-Cから熊池にかけて条里地割が約20町、森林を除く現在の土地利用地が約30町程度であるが、律令時代における土地利用地は、現在以上ではなかったと推測され、少なくとも30町程度の地積があれば、中郡としての小田郡家に必要な空間を満たしていたのであろう。中軸線より西は土地の傾斜がじょじょに大きくなっていることから、政庁域である郡衙は、土地の傾斜が小さい中軸線に沿っていた可能性が強いと推測されることから、郡地名が残るH-I-J-Kの方2町域ではなかったかと想定される。この方2町域を郡衙域とすれば、郡衙域を中心にして、「郡前」・「郡脇」・「郡上」の小字名が生じたのであろう。なお、小字「刈屋」は正倉の一つである萱屋に由来していると考えられる。

郡家内では「郡上」にある郡宮址に注目すべきであろう。地元では郡権現と称しているが、藤原隆景氏所有の郡宮址に関する記録によ

ると古代における名称は不明である。いつ頃からか社名が転化して郡宮と称せられるようになったのであろう。元禄7年にはすでに郡権現宮と称し、五穀豊饒を願っていたが、明治3年3月神社取調べの際に郡神社と改称したことがわかる。ここで注目したいのは、明治維新までは毎年郡内各村に配札を行ない、社殿の改築又は修理の際には郡内72村に寄付帳を出して浄財を集めていたことである。郡内の各村に寄付帳が回っていたことから郡宮が郡の中心的神社、すなわち小田郡の総社であったことは間違いないようで、郡の中心的性格を良くあらわしているといえよう。社殿の改築は建久年中、応安年中、元禄3年3月、宝暦13年4月18日、嘉永5年9月に行なわれていたことがわかるが、建久年以前のことについては記録がない。

筆者はまだ「日本惣風土記」に目を通す機会はないが、「増訂追補小田郡誌上巻」によれば、「小田郡此郡土地農民田多。郡正南有神三座。号小田大神宮。所祭瓊々杵尊。天児屋命。天種子命也。(以下略)」とあり、小田部落の西端に山王権現(日吉神社)があることから、小田大神宮とは山王権現をさすのではないだろうか。大山咋命を祭神とする山王権現は、慶長5年毛利之康領の時に行なわれた検地にも除地となっていたことから、格式高く、小田郷の郷社ではなかったかと(「増訂追補小田郡誌下巻」)推測される。

この山王権現に対して、第4図の小字「神戸」に惣導宮があり、山王権現の祭典行事に神輿が山王権現を出発して郡権現宮に一泊し、惣導宮を遥拝して山王権現に帰ってくることから、三者の間に密接な関係がある(「増訂追補小田郡誌下巻」)ことがわかる。惣導宮がすべての神を導いて祭祀した所とすれば、惣導宮が郡総社で、郡衙域と推測される「郡上」にある郡宮が郡家を守る守護神の祭祀されていた所とも考える。しかし、このことを明確にするだけの積極的根拠はないが、例えば、「筑後国神名帳」上妻郡条に「正六位上郡守神」とあり、郡総社のほかに郡家を守る守護神が考えられる(日野1972)ことから、その可能性もあるという程度にとどめておきたい。なお、郡神社と同様な神社が備中国では都宇郡家址と推定される吉備郡高松町大字加茂小字「片原」に幸利神社、窪屋郡家址と推定される都窪郡山手村大字西郡小字「荒神」に窪屋郡の諸神を祀った村社である郡

大明神がある。いずれも山陽道に近い位置にあることに注目すべきであろう。

小田の東は大字浅海であるが、浅海の小字に「毎戸」があり、駅家所の転訛によって生じた字名と推測されるが、この「毎戸」に「延喜式」に記された小田駅家が比定されそうで、駅里郷の中心地であったのであろう。「毎戸」の271の1番地からは、布目瓦および連華紋の丸瓦を出しており、国分寺瓦と同様の型式で奈良朝末期から平安期初期の瓦といわれ（『増訂通補小田郡誌上巻』）、郡家に近い廃寺址であることから、郡家との関係が深い郡寺（井上1972）であったと考えられる。駅家址は明らかでないが、「毎戸」の東端が条里地割にも及ぶ付近に考えられそうである。この「毎戸」から西に至る官道は、小田に「三通田」・「大道下」の小字名があることから考えて、第3図のようにR-S-C-Tをへて、後月郡に至ったのであろう。この場合、郡家の東南端を山陽道が通っていたと推測され、郡家が交通路とも密接な関連をもっていたことがうかがわれる。

小田郡内における古墳は矢掛から西川面付近にかけての一带が一番多いようであるが、小田では山地の斜面である「神戸」・「林田」付近に発見されているが、この「神戸」も「神部」に由来していることは間違いないだろう。郡家付近には部に関する地名が検出される場合が多いが、熊池の北の日置谷（小田の小字「日置」に由来している）には日置部が居住していたと考えられる。

郡司の史料としては「類聚符宣抄」第七諸国郡司条に「式部省 白丁小田臣豊郷備中国小田郡人 望₂当郡大領小田遂津解之替₁ 右去延喜21年造省料一分代。以₂桑原直生₁ 去天慶3年5月申₂補出雲弩師₁而不₂給₂任符₁ 秩満仍停₂彼宣旨₁以₂件豊郷₁改所₂請如₁件 天慶8年7月23日」,「権中納言從三位源朝臣兼明宣。奉₂勅。停₂去延喜21年造省料一分代出雲弩師桑原直生宣旨₁。宣₂下₁以₂小田豊郷₁改₂任₁備中国小田郡大領小田遂津考解替₁ 同年12月19日 大丞藤原懷忠奉」とあり、小田郡の郡司にも郡名を負う小田氏がなっていたことに注目したい。吉備国の県主が臣姓を名のっていたことから、小田臣も県主の苗裔であろうが、波区芸県主の笠臣系でないことは確かなようである。10世紀初めの史料からではあるが、おそらく律令時代を

通して、小田氏は累代の郡司ではなかったかと推測される。一族のなかでは大仏知識物を進めたために従五位下に叙せられた小田臣根成（『続日本紀』天平勝宝元年4月1日条）、采女正になった小田臣枚床（『続日本紀』天平宝字3年11月5日条）等が代表的な人物で、中央において活躍していたことがわかるが、天平宝字3年以後は史料に出てこないことから、中央における勢力が衰えたのであろう。

最後に郡家のプランについて触れておきたい。小田の狭小な埋積谷における等高線の走行から判断して、A-Cから小田川流域にかけて検出されるごく局地的な条里地割は、A-Cから熊池にかけての条里区と同一であっても不自然ではないと推測される。小田における条里施行が大化後とすれば、郡家を小田に設置する際に、郡家域とそれ以外の地域とを明確に区別するために、計画的にA-Cより南の条里区を生じさせたのであろう。小田と同じ水系の埋積谷である熊池から北の条里区は、日置谷の小河川の流路の方位を基準にして条里が施行されたのであろうが、等高線の走行から判断して、日置池付近までは熊池から以南の条里地割と同一であっても不自然ではないようである。ここでも熊池付近を境にして、条里が計画的に施行されたのであろう。このように郡家址と想定されるA-Cから熊池にかけての条里区の南北に、それぞれ異なる別の条里区があることは、郡家も国府同様、一定の都市的プランにもとづいて設置されたのではないだろうか。A-C間が6町であることから、A-C-F-Gの方6町域の郡家プランが想定されるが、この場合、郡家域の北端の中央部にあたる熊池付近にごく僅かばかりの条里地割がはみ出るにすぎないので、妥当なプランと考えたい。逆に条里施行が大化前代とすれば、郡家の設置は条里施行後になるが、この場合、A-Cから熊池にかけての条里区が郡家域に必要な空間を満たし、しかも郡家域を周辺域から区別する好位置になると判断して設置したのであろう。

ここでは後月郡境から矢掛に至る小田川両岸域に展開される小田郡で最大の条里区に郡家が設けられなかった点にも注目したい。狭小な埋積谷における異なった3つの条里区から考えて、最初から計画的に条里施行と同時に、小田に郡家域を設けた可能性が強いのではないら

うか。このことは郡家域における河川の流れが郡家の中軸線と推定される E-B 間に沿って郡家の入口と推定される B 点に向うこと、その中軸線が埋積谷の中央にあることなどが傍証となりそうである。

4 結 び

律令時代における小田郡の成立過程は明らかでないが、大化前代における波区芸県を中心にして、吉備中・川島 2 県の一部を割いて成立したのであろう。郡名を負う小田が郡域のほぼ中央に位置し、しかも郡家に結びつく郡地名が検出され、さらに郡総社であったと想定される郡権現宮が存在するのである。小田の東の毎戸には、小田駅家が設けられていた可能性が強く、古瓦も発見されていることから、郡寺の存在が推測されるのである。

以上のことから、郡名を負う小田と小田に近い毎戸が律令時代における郡の中心的性格を示すことから、小田に郡家址が比定されることは確実であろう。郡家域の東南端を山陽道が通っていたと推測され、郡家が交通路とも密接な関連をもっていたことがうかがわれる。また、小田川にも近く、当然、水上交通の便にも恵まれた位置にあることも理解されるのである。

小田の狭小な埋積谷に 3 つの異なる条里区が

検出されることから、条里施行と同じ時期に郡家が設置された可能性が強いようである。郡家域の南端が 6 町と想定されることから、郡家プランは方 6 町ではなかったかと推測される。

調査の際にお世話になった井原・笠岡・総社の各市役所、矢掛・真備・高松の各町役場、山手村役場、ならびに郡神社に関する史料保持者である藤原隆景氏、案内していただいた矢掛町役場税務課、史料その他で便宜をはかって下さった同町教育委員会の佐々木文磨氏に深く感謝します。(1972.9.22 受理)

文 献

- 足利健亮 (1963) : 律令時代における一遺趾の探究と復原の試み—郡家の歴史地理学的研究 歴史地理学紀要 5 105-136
 ——— (1965) : 郡家域に関する一考察 人文地理 17 218-219
 ——— (1969) : 郡衛の境域について 大阪府立大学歴史研究 11 37-60
 日野尚志 (1972) : 筑後国上妻郡家について—「筑後国風土記」逸文を中心にして— 史学研究 117
 井上 薫 (1972) : 郡寺と国分寺 続日本古代史論集上巻 吉川弘文館 587-612
 名著出版 (1972) : 増訂追補小田郡誌上巻 24
 ——— (1972) : 増訂追補小田郡誌下巻 追補 10
 ——— (1972) : 増訂追補小田郡誌上巻 29
 岡山県 (1962) : 岡山県の歴史 69

The Oda Gûke in Bichû Province

Takashi HINO

The formation of the Oda District during the Ritsuryô Period is un-documented. We may safely assume, however, that formation took place in the Pre-Taika Period by the aggregation of parts of the two *agata* of Kibi-Naka and Kawashima to Hokuki which, consequently, became the central part of the Oda District.

Oda is the name of both the whole district and the central part of the district. Many names connected with the *Gûke* (District Office) have been found in the central part and the Kôri-gongen-gu, which was probably the central shrine for the entire district during the Ritsuryô Period, is still extant.

The so-called Oda Umaya (Oda Relay-station) was probably located in Maido east of Oda. Many roof tiles from the temple which was probably the *Gunji* (the district temple connected with the *Gûke*) have also been found in Maido.

Since both Oda, which gave its name to the whole district, and Maido, which is near Oda, show traces of having been centers of the district, we conclude that the *Gûke* was established in Oda.

The San-yo Road is thought to have passed through the southeastern part of the *Gûke* area; thus, we can infer that the *Gûke* had easy access to land transportation. Moreover, since the *Gûke* was situated on the Oda River, it must have been connected to good water transportation links.

Judging from the fact that three different *Jôri* systems have been found in the comparatively small Oda valley, it seems certain that the *Gûke* was established at the time when the *Jôri* systems were being enacted. As the southern side of the *Gûke* is 6 *cho* (about 654 meters) in length, it can be assumed that the *Gûke* was 6 *cho* square.